

ボートハウスのお客さま

やなぎや けいこ 作

奈良坂 智子 絵



N.D.C. 913 ポートハウスのお客さま

やなぎや けいこ 作

奈良坂 智子 絵

旺文社 1985

108p. 22cm (旺文社創作児童文学)

小学中級以上

やなぎや けいこ (柳谷圭子)

東京生まれ。慶應義塾大学経済学部を経て、ブエノスアイレスのサルバドル大学に留学。

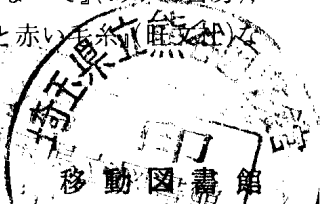
おもな訳書に、『ヴェロニカのために』(河出書房新社),『ちびくじらのぼうけん』(ポプラ社)がある。

おもな著書に、サンケイ児童出版文化賞の大賞を受賞した『はるかなる黄金帝国』(旺文社)のほか、『まぼろしの都のインカたち』(旺文社),『ラ・プラタの太陽の下に』(光風社)などがある。

奈良坂智子 (ならさか ともこ)

千葉生まれ。桑沢デザインを卒業。グラフィック・デザインの仕事をを経て、『びんすけとひよこ』(金の星社)で児童書の世界に入る。

染めた和紙を主に使った貼絵は、はっきりしたあたたかさがあり、特異の世界を持っている。仕事には、『やまねこのほし』(ポプラ社),『らくがきはけさないで』(あかね書房),『しいちちゃんと赤い毛糸』(旺文社)など多数ある。



ボートハウスのお客さま

やなぎや けいこ 作

奈良坂 智子 絵



装丁
さしえ

奈良坂智子

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

も
く
じ





もうすぐ春はるです 7

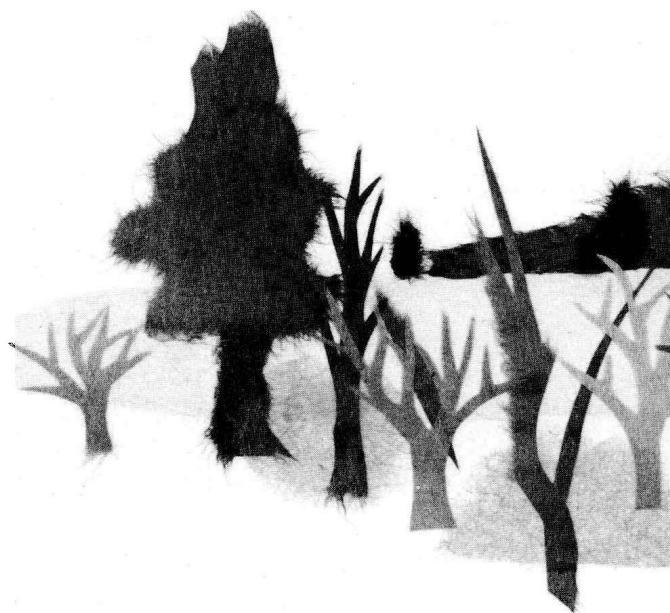
星ほしがあればなあ 21

キリの中のけんか 37

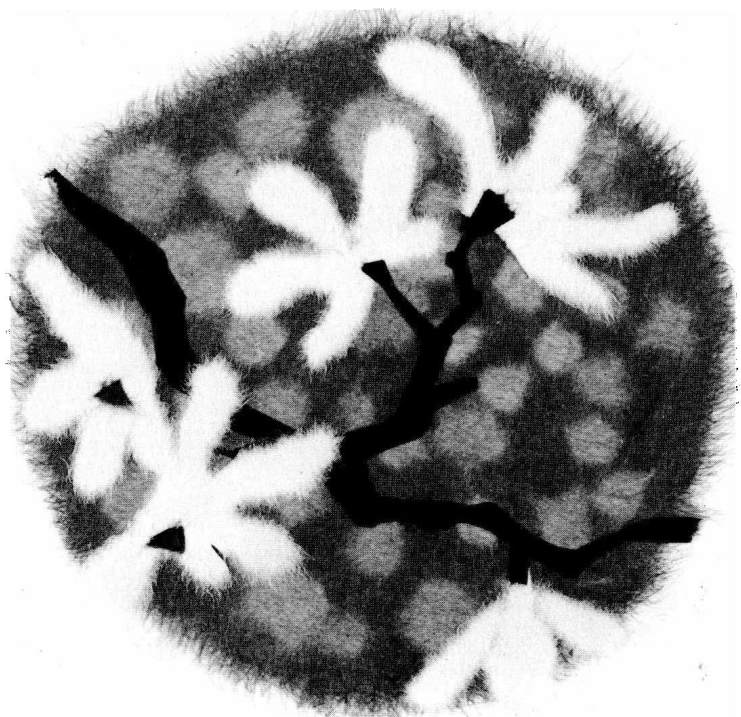
秋あきの小包こづみ 55

満月まんげつのばんに 69

フキノトウのにおい 87



もうすぐ春はるです



ガラガラガラッ。

ダイスケさんは、いきおいよく戸をあけました。
とたんに、

「わっ、こりやさむいや！」

と、首をちぢめました。

「きのうは、あんなにあったかかったのになあ。」
はく息^{いき}が、まっしろでした。

ここは、山の湖です。

湖のまわりに、たてものといったら、二けんだけです。お客が十人も入れ
ば、いっぱいになってしまいそうな、こじんまりしたホテル。そして、ホテ
ルとなりあつたボートハウス。

ダイスケさんは、そのボートハウスの、わかい管理人かみりだんです。

会社の休みの日に、ダイスケさんが、ここにスケッチにやってきたのは、二年前の春の終わりでございました。

三時間も、えっちらおっちら、山道をのぼって、ある角をまがったとき、ダイスケさんは、思わず、

「ヤッホーイ！」

と、さけんでしまいました。

目の前に、いきなり湖があったからです。

とても冷たつめたそうな水の、小さい湖でした。

湖は、モミヤ、トウヒヤ、カラマツの林にかこまれていました。向こう岸には、シラカバの林があつて、そのおくは、低い山につづいています。

サワサワつと風がふくと、水の中の木のかげや、雲のかげがゆれました。初めて来たのに、なんだかなつかしいけしきでした。

その日、ダイスケさんは、ホテルの持ち主のおじいさんに、むりにたのみました。そして、ボートハウスの管理人^{かんり}として、やとってもらったのです。

夏休みと、冬のスケートのシーズンには、ホテルはいつも満員でした。

山の上にあるこの湖には、毎日、朝と夕方、ふもとの町から、バスがのぼってくるのです。

「ダイスケさん、おはよう。」

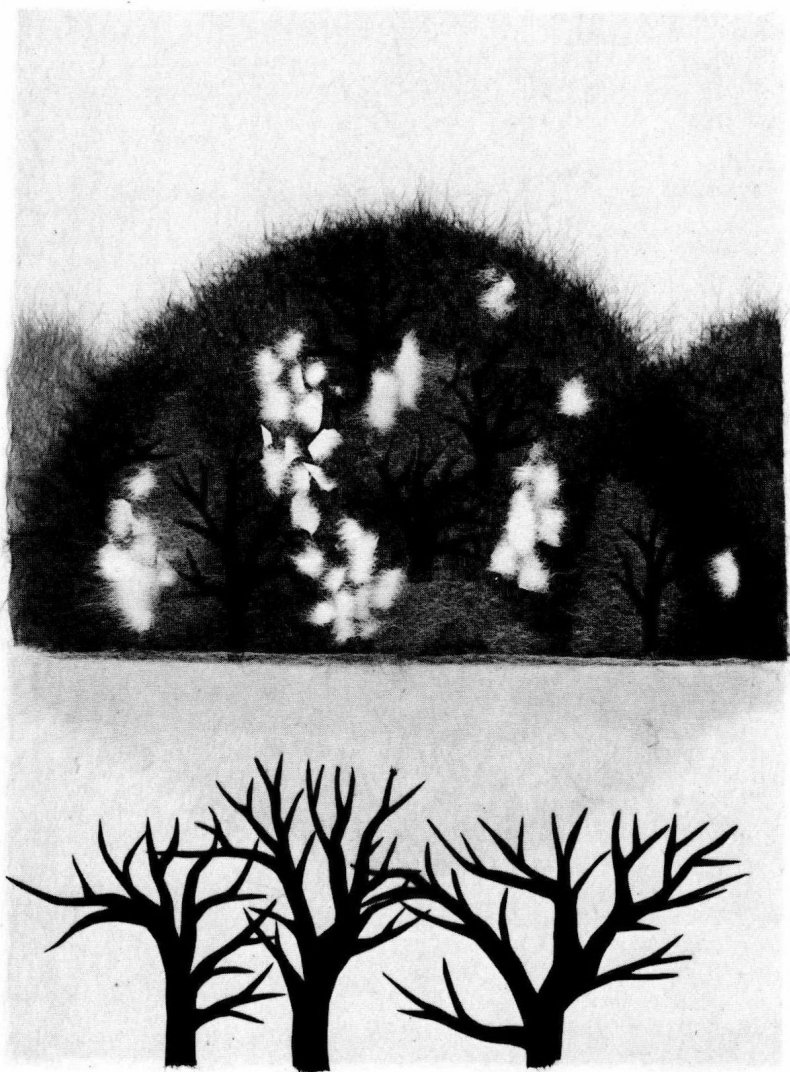
ホテルのげんかんから、持ち主のおじいさんが、顔をだしました。

ツルツル頭の、小さいおじいさんです。背の高いダイスケさんの、かたまでもありません。

「おはようございます。けさは、冷^ひえますねえ。」

「ああ。だが、そろそろ木が動き出してきたじゃないか。」

にこにこしてそういつて、おじいさんは、向かいの山を、ゆびさしました。



ダイスケさんは、首をかしげました。きのうまでの山と、あまり変わっていないようでしたから。

ふもとの町の木々は、もう、とくに芽を出しているというのに、向かいの山のけしきは、まだ冬のまま。花をいっぱいにつけたコブシの木が、白いろそくのように、ポツリポツリと、立っているだけでした。

「ほら、山が何となく、もも色になっただろうが、あと一週間もお天気の日がつづけば、いっぺんに、芽を出すよ。」

そういわれてみればそうかな、とダイスケさんは、山を見ました。

五月になると、ふもとの町からも、近くの町からも、人がのぼって来ます。ボートハウスも、いそがしくなるのでした。

「さて、きょうは、オールのパンキぬりののこりを、しあげてしまおうかな。」
セーターのうでをまくりあげて、ダイスケさんは、いいました。仕事場は、湖につき出した、さんばしです。

それから、しばらく、ダイスケさんは、せつせとはたらきました。

朝のバスがついたのにも気がつかなかったほど仕事にむ中でした。

やがて、オールはどれもこれも、新品のように、ピカピカになりました。

ダイスケさんが、フーツと息をついたときです。ふるえ声がありました。

「あの、ストーブにあたらせてくれませんか。」

自分ひとりだとばかり思っていたダイスケさんは、ギクツとして、顔をあげました。

目の前に、男の子が一人、立っていました。寒そうに、歯をガチガチならしています。くちびるまで、真青です。

それもそのはず、男の子は、真夏のふくそうを、していたのですから。

黄緑色の、うすい半そでのシャツに、こけ色の半ズボン。手も足も、まる出しなのでした。

ダイスケさんは、あきれていました。

「そんなかつこうじゃあ、寒いのはあたりまえだよ。さ、これをきて。」

ダイスケさんは、セーターをぬいで、男の子にかしました。

男の子の手も足も冷えきって、まるで、氷のように冷たいのです。

「早く、家に行こう。」

ボートハウスに帰ると、ダイスケさんは、いそいで毛布を出して、男の子をくるみました。毛糸のマフラーも、首にぐるぐるまきつけました。

ストーブのまきに、早く火がつくように、スギの葉のたきつけも、いつもよりたくさん使いました。

それでも、まだ、男の子はふるえています。

「待っておいで、いま、おじやを作ってあげるから。」

ダイスケさんは、いいました。

「朝のバスで来た子だな。それにしても、ふもとの町は、よほどあたたかなんだな。」

男の子をよこ目で見ながら、ダイスケさんは、そう思いました。

やがて、おじやに散らしたフキノトウのにおいが、ボートハウスに流れました。

それは、なつかしいにおいでした。

こどものころ、ダイスケさんは、まい年、春になるのが待ちきれませんでした。外にとび出すと、しめった土のにおいがうれしくて、うれしくて、夕方おそくまで、あそんでいたものです。

手も足も冷えきって帰ると、ダイスケさんの母さんは、いつも、こうしておじやを作ってくれました。

おじやを食べ終わると、男の子の体のふるえも、やっとおさまりました。

「ありがとうございます。あたたかくなりました。」

男の子はそういって、はずかしそうにわらってみせました。

「それにしても、きみはうす着すぎるよ。ふもとの町とここでは、ずいぶん